

本多弘之

honda hiroyuki

宗教心と根本言

5

仏道の成就を願う心（仏教における宗教的要求）を「菩提心」と呼ぶ。この菩提心を法然上人は念仏往生による衆生の救済には、「不必要」であると考えられた。「選択集」にそのことを、「菩提心等の余行」を択び捨てて「念仏の一行」を選び取る、それが十方衆生を平等に撰取せんとする「撰本願」であると宣言された。これに対して、明恵上人が菩提心を不要とすることは、外道であると裁

断して、「摧邪輪」を執筆された。言うまでもなく「無量寿経」の三輩段には、三輩に通じて「発菩提心」の語がある。しかし、同じく三輩に通じて「一向専念無量寿仏」の語があることに注目するなら、「一向」とあることは「二向・三向」ではないし、「専念」とあるのだから、ここにこそ教主世尊の本意がある、法然上人はこのことに気づかれた。発菩提心を他の諸行と同質の選

撰本願が択び捨てる行（仏教では身口意の三業と言って、身体的行為「身業」や言葉による表現「口業」のみでなく、内なる思索や思いや意欲も行為「意業」であるとする）であるとされた。しかし親鸞は、明恵の非難は「菩提心」の語に付帯する意義から出てくる必然性をもつたものと判断した。菩提心が成仏するのは菩提を成就するからである。しかしそうであつ



ても、本願の教えでは信心が成仏する。だから信心は「真実の菩提心」と言うべきである。そこで、一般に言うところの菩提心を自力の菩提心、すなわち「堅」の菩提心であるとし、他方回向の菩提心は横の菩提心、なかでも本願成就の信心は「横超の大菩提心」であるとされた。

その「横」とは、本願の大悲によって一切衆生に平等に回向表現される生命横断的な意味を表している。いかなる状況の差異や個人的な特殊性にもとらわれることなく、生きとし生ける存在に普遍的にかかわる大悲のはたらき方を示そうとする言葉なのである。このことは、個人の側に執着する我ら凡夫の発想には、実に考えにくい。親鸞は、大乘仏教の根本的課題、すなわち一切の衆生が平等に救済され得る方向を表現しようとする意欲こそが、『無量寿経』の本願の思想の意味だと見抜いたのである。

その『無量寿経』には、本願による衆生への付与を説き表す事柄が、下巻初頭に出されている。普遍的な意図をもつ大悲が、その願力成就の事実を衆生に開示するために、『無量寿経』下巻に説き出しているのが、本願成就の文である。その成就文には、「諸有衆生聞其名号 信心歡喜 乃至一念」とあるが、これを親鸞は第十八願の成就文、すなわち「本願信心の願成就の文」と名づけ、とくに

これ以降の「至心廻向 願生彼国 即得往生 住不退転 唯除五逆 誹謗正法」を「欲生心成就の文」と読んだ。

我ら凡夫が自分で起こす心なら、いかに真面目に思い立とうとも、凡夫心のままなら自我の執心を孕んでいる。そのことへの気づきを語るものが、善導の深心積のいわゆる機の深信である。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、眩劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなし、と決定して深く信ずる」ことが、「横」という方向を信じさせるのである。別言すれば、本願力の深い計らいなしには、この気づきはあり得ないのである。

普通には、「横」という方角は、前に向いて歩むことを常識にするとき、非常識を意味する。横あい、横やりとか、横車、横流し、さらには横柄、横着など、理に合わない事柄に使われることが多い。この意味を換骨奪胎して、その理に合わないという意味を、凡夫からはまったく思いつかない不可思議なはたらきとして、大悲の願心を教えているのである。

愚痴深き凡夫に対し、大悲の本願に値遇させる縁として、思議しがたい名号を選び出したのである。大悲がいかに十方衆生に呼びかけていても、衆生の側からはそのことを気づけない。そこに「横合いから」、突然「横車」

を押すように、名号が提出されているというわけである。本願成就文に「至心廻向」という語が出ていることを、親鸞はこのように領解したのである。

「至心」とは衆生にはあり得ない真実なる心である。これがここに置かれていることは、いわば「横やり」のごとく願力が突出してきていることを表そうとする意味があるのだ、と。それにおいて初めて、我らに成り立つ信心が真実たり得る、と。だから、「至心廻向」は如来が名号を回向することなのだ、と。

形なき願心に形を与え、声なき声に名号の大音声を具足させる。ここにおいて、大悲が衆生に横超的に呼びかける願が成就するのである。それを「如来の欲生心」の成就と呼ぶ。和讃に「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず」とある。真実なる信は、本願との値遇を縁として発起する。大涅槃から興起する本願は、その本の大涅槃を衆生にもたらしめるのは自然であり必然でもある。その必然性を衆生の事実にするために、法蔵願心の「兆載永劫」のご苦勞があるのだ、と信ずるところに念仏成仏が自然にうなずけるのである。

(続)
(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)